

日本付近のおもな被害地震年代表

有史以来のおもな被害地震を選んだ。年月日、震央の位置、 M_j 相当のマグニチュード（記号 M）、地域は、1884 年までは『日本被害地震総覧』（599-2012、宇佐美ほか、2013）と『地震活動総説』（宇津、1999）、1885 年から 1918 年までは『地震の事典』（第 2 版の「日本の主な地震の表」、茅野・宇津、2001）に基づき、他の研究成果も取り入れた。1919 年以降は気象庁が月報などで公開した値である。年月日は最初に西暦（常にグレゴリオ暦）、（ ）内に日本暦を示した。

地域は 1884 年まではおもに被災地を表し、1885 年以降は震央地名（1919 年以降は気象庁の地震情報の区分）を表す。*印は当時の気象庁震央地名、[3]などの数字は宇津の被害等級である。被害摘要は旧版被害地震年代表や『日本被害地震総覧』、『地震活動総説』、『地震の事典』、消防庁災害情報などをもとに記述した。1996 年以降の震度は計測震度。関連死については（ ）内に記した。全壊、半壊などは棟数を表す。1872 年以前の記事に現れる日付は日本暦に対応する。記事の最後の[]内は今村・飯田による津波規模である。被害情報は原則、5 年経過で確定とする。

平成 17 年版より地震の選択基準を原則「死者 1 名以上または家屋等の全壊（潰）1 以上または津波規模 1 以上」とし 1885 年まで遡って適用した。また、平成 23 年版よりグローバル CMT プロジェクトによるモーメントマグニチュードを記号 Mw とともに併記した。ただし、*印は防災科研や文献の値。遠地津波の項にある記号 Ms は震源の表面波マグニチュード。被害等級、津波規模、各種マグニチュードについては地震関係公式諸表を参照。名称はおもに『地震学』（第 3 版、宇津、2001）に従ったが、誤った元号を含むときはそれを日本暦にくゝ付きで追記した。1960 年以降は気象庁命名のものから年などを除いたもの。

番 号	西暦(日本暦) 緯度 経度 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
1	416 8 23 (允恭天皇 5 7 14) 遠飛鳥宮付近 (大和):『允恭天皇の大和河内地震』:「日本書紀」に「地震」とあるのみ、被害の記述はないが、わが国の歴史に現れた最初の地震。疑わしきか?
2	599 5 28 (推古天皇 7 4 27) 大和:倒潰家屋を生じた。「日本書紀」にあり、地震による被害の記述としてはわが国最古のもの。被害の範囲が不明で M は推定できない。
3	679 1/2 -(天武天皇 7 12 -) M6.5~7.5 筑紫:家屋の倒潰が多く、幅 2 丈、長さ 3 千余丈の地割れを生じた。
4	684 11 29 (天武天皇 13 10 14) M≒8 ¼ 土佐その他南海・東海・西海地方:「天武天皇 (白鳳) の南海・東海地震」:山崩れ、河湧き、家屋社寺の倒潰、人畜の死傷多し、津波来襲して土佐の船多数沈没。土佐で田苑 50 余万頃 (約 12 km ²) 沈下して海となった。南海トラフ沿いの巨大地震と考えられる。[3]
5	701 5 12 (大宝 1 3 26) 丹波:地震うこと 3 日。被害が不明なので M も不明。藤原京では感じなかったらしい。若狹湾内の凡海郷が海に没したという「冠島伝説」は否定されている。